

こえに だして よみましょう。

いちようの実 み ⑥

みやざわけんじ
宮沢賢治

ぼくはそのときばけものの胃いぶくろのなかでこの網あみをだしてね、すっかりかぶつちまうんだ。それからおなかじゅうをめっちゃめちやにこわしちまうんだよ。そら、ばけものはチブスになって死ぬしだろう。そこでぼくはでてきてあんずのおひめ様おひめさまをつれてお城しろに帰かえるんだ。そしておひめ様おひめさまをもらうんだよ。」

「ほんとうにいいね。そんならそのときぼくはお客きやく様さまになつていてもいいだろう。」

「いいともさ。ぼく、国くにを半分はんぶんわけてあげるよ。それからおつかさんへは毎日まいにちおかしやなんかたくさんあげるんだ。」

星ほしがすっかりきえました。東ひがしの空そらは白くもえているようです。木きがにわかなにざわざわしました。もう出発しゅつぱつに間まもないのです。

「ぼく、くつが小さいちいや。めんどくさい。はだしていこう。」
「そんならぼくのとかえよう。ぼくのはすこし大おきいんだよ。」

「かえよう。あ、ちようどいいぜ。ありがとう。」